

# 平成二十年歌会始御製御歌及び詠進歌

火

御製

炬火台に火は燃え盛り彼方なる林は秋の色を帯び初む

皇后陛下御歌

灯火ひを振れば彼方の明かり共に揺れ旅行ゆくひと日夜よるに入りゆく

皇太子殿下

蒼あをき水たたふる阿蘇の火口より噴煙はのぼる身にひびきつつ

皇太子妃殿下

ともさるる燭の火六つ願ひこめ吹きて幼なの笑みひろがれり

文仁親王殿下

囲炉裏の火見つつ話を聞くときに心ときめく古老らの智に

文仁親王妃紀子殿下

夕闇にかがり火あかくてらしたる鶉匠は手縄かろらかにひく

正仁親王殿下

新嘗の篝火の火は赤や黄となりてとびちり闇を照らしぬ

正仁親王妃華子殿下

しづもれる宮居の杜の夕つ方かがり火たきて御祭みをまつ

崇仁親王妃百合子殿下

萌えいづるものをたのみて山やきの火はたちまちにひろごりてゆく

憲仁親王妃久子殿下

暮れそめし賢かしこむところ所の大前に衛士の焚く火の清らかに燃ゆ

御製

炬火台に火は燃え盛り彼方なる林は秋の色を帯び初む

昨年の九月末、秋田県で開催された国民体育大会の開会式にご臨席になった折の情景を詠まれた御製。

皇后陛下御歌

灯火ひを振れば彼方の明かり共に揺れ旅行ゆくひと日夜よるに入りゆく

地方行幸啓で、夜分、地元有志の提灯奉迎をお受けになることがあり、その時の情景をお詠みになった御歌。夜の市街をあまり騒がせても、との両陛下のお考えから、近年万歳の回数は控え目にされておられ、この間、両陛下がお手の提灯を左右にゆっくりとお振りになると、自然と奉迎者の提灯もそれに合わせて振られ、お気持ちの通い合う中、旅の一日が暮れていくことの喜びをお詠みになりました。

皇太子殿下

蒼あをき水たたふる阿蘇の火口より噴煙はのぼる身にひびきつつ

皇太子殿下には、昨春秋、熊本県行啓の際に阿蘇山にお立ち寄りになりました。

このお歌は、青い水をたたえる火口から激しく吹き上げる噴煙を間近にご覧になり、阿蘇の雄大さに感動されてお詠みになったものです。

皇太子妃殿下

ともさるる燭の火六つ願ひこめ吹きて幼なの笑みひろがれり

愛子内親王殿下は、昨年十二月に六才のお誕生日をお迎えになられ

ることを大変楽しみになさっていらっしやいました。このお歌は、お誕生日のお祝いの折り、ケーキに立てられた六本のろうそくの火を吹き消された内親王殿下のお顔に喜びの笑みがひろがっていく様子をお詠みになられたものです。

皇太子妃殿下は、お誕生日を心待ちにしておられた内親王殿下のご成長を嬉しくお思いになられこのお歌をお詠みになりました。

#### 文仁親王殿下

囲炉裏の火見つつ話を聞くときに心ときめく古老らの智に

古老たちがもっている生き物についての知識には、本に書かれていないことや、いままで聞いたことのない話がたくさん出てくることがあります。そのなかには、自然環境の保全や生物種の資源保護に役立つ知識や知恵が含まれています。

このお歌は、秋篠宮殿下が生き物の民俗に関する調査をなされた際に、そのような豊富な「智」をもった人たちとの語らいの様子をお詠みになったものです。

#### 文仁親王妃紀子殿下

夕闇にかがり火あかくてらしたる鶉匠は手縄かろらかにひく

秋篠宮同妃両殿下は、平成十七年五月十二日から十三日にかけて「平成十七年度ジャパンフラワーフェスティバル二〇〇五ぎふ」開会式ご臨席のため岐阜県にお成りになりました。その折、秋篠宮妃殿下は長良川で鶉飼をご視察になり、夜の川面で篝火に照らされながら巧みに鶉を操る「鶉匠」の見事な技をご覧になりました。

このお歌はその時の様子をお詠みになったものです。

正仁親王殿下

新嘗の篝火の火は赤や黄となりてとびちり闇を照らしぬ

正仁親王妃華子殿下

しづもれる宮居の杜の夕つ方かがり火たきて御祭をまつ

御神楽の儀の様子をお詠みになったものです。

崇仁親王妃百合子殿下

萌えいづるものをたのみて山やきの火はたちまちにひろがりてゆく

方々である山焼きをお詠みになったものです。

憲仁親王妃久子殿下

暮れそめし賢かしこころ所の大前に衛士の焚く火の清らかに燃ゆ

両殿下のご結婚の儀は十二月六日に行われ、最初にご参列になられたお祭りが御神楽でありました。その際に高円宮殿下が仰られたとおり、実に心を動かされるもので、以来、毎年その静寂で神秘的な空間にご自身がおられることを幸せに思って来られたと伺っております。このお歌はその時の様子を思い起こしてお詠みになったものです。

召人 宮英子

袴領巾のましろき尉じょうをまとひたる囲炉裏火ぬくし夜のほどろを

選者 岡野弘彦

世の始めに火を生みいでてかうかうと面おもてかがやく若おやきみ母神

選者 岡井隆

小さな火を育てつつ守るときこころの部屋のあたたまり来る

選者 篠弘

音たてて指先に火の揺れ出づる銀のライターいかになりけむ

選者 三枝昂之

迎へ火は今年も焚かず父母はみづからともる蛍であらう

選者 永田和宏

火の匂ひかすかただよふ夕暮れを浮力まとひて雪虫は飛ぶ

選歌 (詠進者生年月日順)

山口県 魚本マヌエ

しんしんと雪降る空にとどろきて進水式の花火は上る

青森県 中村正行

田づくりも今宵かぎりと焼く藁の赤き火見つむ妻と並びて

ブラジル国  
サンパウロ州 渡辺光

晩秋の牧場の地平に野火走り一千頭の牛追はれくる

京都府 浅野達子

嫁ぎ来て五十年仰ぐ送り火がこの夏も燃ゆ大の字に燃ゆ

北海道 西里喜久男

海峽の沖に群れゐる漁火の一つ靜かに移動はじめつ

大分県 山崎美智子

二〇〇〇度の高炉より出で圧延に入りたる鋼のなほ火炎ほむらだつ

愛媛県 岡田まみ

高窓に赤くつめたき火星きてローマ史最終巻をひもとく

島根県 吉田友香

夜神樂の火は赤あかと燃え盛り大蛇の顔の迫り来るなり

大阪府 宮川寛規

火の中にかすかに見えるものがあるそれはいつもとちがふ風景

佐賀県 田中雅邦

一人見る花火はさびしいものだよと赴任の地から父は電話す

佳 作 (詠進者生年月日順)

石川県 陶山弘一

日本の火が見えるぞと甲板デッキより伝声あれば皆立ち上がる

アメリカ合衆国  
ハワイ州 ヤエコ・パワーズ

機内より見ゆるあかりは漁火か恋ひし日本にああ帰り来ぬ

福岡県 磯村昌二

作業場にやがて雨くる気配して水飴炊く釜の火力を上げぬ

栃木県 澤村孝夫

炭窯の火口閉ざすと霜夜来て炎の揺らぎしづまるを待つ

東京都 小林シゲ

被災地にまづ火が焚かれ輪になつて掌をかざしつつ湯の沸くを待つ

愛知県 木村七夫

あかあかと水面に映えるかがり火に鵜匠の手綱生きて伸びゆく

長野県 小池聡子

寒天工場にバーナーの音ひび交ひて火はあかあかと天草を煮る

千葉県 西森和枝

小雨ふる最中<sup>さなか</sup>も枇杷の袋かけ冷ゆるからだに焚火を囲む

長野県 小林正人

昼の雨雪となりきて駅構内のカンテラ融雪器に火を点しゆく

長野県 松森敦子

常念の雪形に春を確かめて放てる野火の煙たなびく

千葉県 粕谷征三

園児らの描く焚火は画用紙に大きな藪がはみ出しにけり

山口県 中柴陽子

今度こそ「合格だね」と言はれたくて何度も何度も火加減をみる

大阪府 上田奈緒

キャンドルに灯る火をみて涙ぐむ一人で開く誕生日会